

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	25221205	研究期間	平成25年度～平成28年度
研究課題名	組織修復・再生における間葉系細胞のダイナミズム：統合型研究	研究代表者 (所属・職) (平成30年3月現在)	尾崎 博（東京大学・大学院農学生命科学研究科・教授）

【平成27年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○ A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は、各種間葉系細胞の組織障害時における役割、特に、臓器線維化に対する関与を追究するもので、病態時の細胞分化や収縮等の分子機構の解析を行っている。研究代表者及び研究分担者は、異なる細胞あるいは分子機構を研究対象としているが、腸筋線維芽細胞が分泌するテネイシン C が粘膜修復を促進すること、セロトニン3受容体拮抗薬が腸管運動機能障害を抑制すること、漢方薬が術後イレウスに対して抗炎症作用を示すことなど、これまでに幾つかの重要な進展があり、全体として概ね期待された成果を上げつつある。今後は、研究代表者らによる多面的なアプローチの研究を統合し、臓器線維症の治療も視野に入れた共同研究体制の強化が望まれる。

【平成30年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	本研究は、これまでに筋線維芽細胞への機能分化に重要な分子としてテネイシン C や CPI-17 を同定するとともに、内皮細胞、上皮細胞など各種細胞において筋線維芽細胞への変化に関与する様々なメディエーター分子の重要性を明らかにした。特に、脂質メディエーターである PGD2 では抗炎症作用に関する重要な知見を得ている。